

「臓器バンクって？」

(2012.10.02 山陽新聞掲載)

皆さんは「臓器バンク」というと、どのようなことを想像されるでしょうか？バンクと名前が付いているため、「提供を希望される方から臓器を一時的に保存しているところ…」でしょうか。

実は、県臓器バンクは臓器の直接保存や臓器の受け渡しを調整する組織ではありません。「移植医療を受けて健康を取り戻せる喜び」「臓器を提供して下さる方の善意の崇高さ」、そして「患者さんとご家族を支援する医療関係者の思い」などを県民の皆さんに伝え、理解を得て、岡山で移植医療が進むよう支援する組織です。

臓器提供してもらおう場合、ご本人やご家族が「納得できる最善の治療を受けても、助からない場合がある」ことを受けとめてもらうことが何よりも大切です。このため、最善の治療はもちろん、家族への温かいケアなど、「医療の質」が高くなければなりません。私たち医療者は、このことを肝に銘じるべきです。

さて、県臓器バンクは10月6日午後1時半からピュアリティまきび(岡山市北区下石井)で『いのちのりレーを考える講演会』を行います。「生と死の医療～私たちに何ができるのか～」と題し、救急現場での救命に向けた絶え間ない努力や残念ながら救命できない場合の手厚い家族ケアについて、お聞きいただけます。詳細は、県臓器バンクのホームページに掲載しています。

まずは、命の大切さを、次に移植医療について考えてもらう機会にしてもらえればと思います。

「おしっこ、の話」

(2012.10.09 山陽新聞掲載)

皆さんは1日に何回ぐらい「おしっこ」に行きますか。毎日のことであり、あまり気にしたことはないかもしれません。好きな趣味に没頭したり、仕事に追われるなどして、トイレに行くのが煩わしいと思ったことはありませんか。

慢性腎不全のため、腎移植を受けられたある男性患者さんが、次のような話を聞かせてくれました。手術を終えて元気に退院し、田舎の田畑やその向こうに広がる山々がトイレの窓から望める自宅に戻った時のこと。それまで15年間も使わなかった男性用トイレでおしっこをした時、窓から見えた景色の素晴らしさとおしっこをする爽快感をしみじみと感ずることができたそうです。

週3、4回の人工透析療法から逃れられない事実と、それを欠かせば命にかかわる不安…。このような時間的制約や精神的負担から移植によって開放され、おしっこをする喜びにつながったのです。男性は「健康は失った時に後悔し、取り戻した時に、より大切にしたいもの」と感じたのではないのでしょうか。

今、病魔と闘っている方々はくじけることなく前進してください。あなたの周りには多くの医療者がいます。あなたに手を差し伸べ、できる限りの支援をしてくれるはず。一緒に歩んでください。

一方、健康な皆さんはその満足感を失わないよう努めなければなりません。もしも自分の健康を過信しているのなら、失くした時に後悔しないためにもう一度、自身の健康管理について考え直すべきです。

私が勤務する国立病院機構岡山医療センター(岡山市北区田益)では、皆さんの健康維持に向けたさまざまな相談に応じています。気軽にご来院ください。



「死”って？ その1」

(2012.10.16 山陽新聞掲載)

皆さんは“ヒトの死、をどのように受け止めていますか？

10月6日に岡山県臓器バンクと県が開いた講演会で、講師を引き受けてくれた救急医が次のような話をされました。「多くの皆さんは『息が止まり、心臓が動かなくなったら、死んでしまった』と思われるでしょうが、救急医療の現場では少し違います。心臓が停止した状態で病院に運ばれた患者さんでも心臓がもう一度動き始め、自分で歩いて退院されることもあります」とのことでした。

具体例として、中年の女性が突然、倒れて救急車で運ばれてきました。救急車の中で止まってしまった心臓を動かす電気ショック(カウンターショック)を何回施しても回復しませんでした。ですが、救急病院にたどり着き、「人工心肺装置」(心臓と肺の働きを担う医療器具)を取り付けて治療を続けたところ、2日後に心臓の鼓動が再開。幸い脳がまだ生きていたので心臓も回復、元気になって後遺症もなく退院できたのです、と話されました。

聴講されていた方々は「2日間も停止していた心臓が再び動くことがあるとは想像もしませんでした」「心臓が止まって数時間治療して回復しなかったら、もうだめだと思っていました」と一様に驚かれていました。

昔は亡くなった人を仏間に寝かせて数週間見守り、よみがえる兆しが無ければ亡くなったと受け止めていた社会があったそうです。心臓が止まっても、脳が働かなくなっても、身体の細胞の最後の1個が死ぬまでは生きていると考える科学者もいます。

今回は、臓器提供の際に耳にされることが増えている“脳死、についてお話ししたいと思います。

「死”って？ その2」

(2012.10.23 山陽新聞掲載)

私の身近な人に「脳死判定は何のために行うと思いますか？」と問い掛けてみました。

その答えは「う～ん、臓器提供のためでしょ...」「脳が機能しているかどうかを知るため...」「脳死判定は『もう助からない』と言われること...」とさまざまでした。

「脳死判定はみんなに行うものなの？」「死んでいると決めるためのもの？」「(臓器提供)意思表示カードを持っている人全員にするのでしょ」との返答もありましたが、最後には「脳死判定という言葉が悪い！。脳機能検査の方がよい」という素晴らしい意見も出ました。

私は勤務先の国立病院機構岡山医療センター(岡山市北区田益)付属の看護学校で看護学生に講義をしています。その際に必ず「脳死と植物状態の違いを説明できますか？」と問い掛けるようにしています。「できます！」と自信を持って挙手する学生はごくわずか。だから、一般の方々が戸惑うのも無理はありません。

脳死判定は、今後の治療が意味あるものか無意味なのかを判断する検査です。脳死と判定された場合、どのような治療も全く効果を期待できないのです。自動車に例えると、走行中の車のエンジンが突然、停止した時、エンジンが再び動きだすか、修理不能かを判断する検査なのです。修理不能の場合、車は惰性で少しの間進んだ後、必ず止まります。このように脳死と判定された患者さんの心臓はおおよそ2週間でその動きを止めてしまうのです。

